

清水エミ子氏
「手先の動きと
子どもの感情」
について

立川多恵子

子どもとの確かな心のつながりを持ちたい。これは母親のねがいでもあり、保育者のねがいでもある。

子どもが幼い場合は、自分の意思を他に伝える言葉を知らないし、自分の感情を言葉で表現することができる年齢になると、かえって意に反した形の伝達をするようになる。そうになると、時には、その言葉にまどわされ、子どもの心の深部のなやみや、要求をつぶさに理解することが困難になる。

清水先生が、子どもたちの手、子ども

たちの指先が、保育者にいろいろなことがらを語りかけてくれるということを見されたのは、ご自分の幼稚園に精神薄弱児・盲・聾啞児をかかえ、その保育に真剣にとりくまれた経験からも生み出された貴重な産物である。(幼児の教育第六十九巻五月号～十一月号に掲載)

十月のある日、私たちは、お茶の水女子大学付属幼稚園の一隅にある保育研究室で、清水先生をかこんで「子どもの手先の動きと、子どもの感情」について、座談会を持った。

先生は、開口一番、「今後、どんな方法で、この研究を進展させていこうか、思案中です。今、一つの方向として、もう少し、実験的な試みをふやしていきたいと考えています。私が最近気がつき始めたことは、あるできごとと直面した子どもの手先の動きが、早生まれの子どもと、遅生まれの子どもとでは、どこかちがうということです。そこに何かあると思うのです。例えば、早生まれの子の手や、指先の動きは率直だけど、遅生まれ

の子どもの場合、一瞬おくれて行動が起る感じですよ」

清水先生の幼稚園は、一年保育のみである。年齢差の少ない集団の中でも、かつ、子どもの手、指先の動きから、指導効果のもっとも上がる年齢が、どの段階にあるかをさぐりあてようとしていらっしやる。

近頃、私も先生のご研究に少なからず興味を持ち、訪問先の幼稚園で、しばしば園児の手や、指先を見る。

しかし、残念ながら、子どもの手や、指先が、今、何を語っているのかわからないことが多い。

第一、よほど心がけないと、日頃の習性で手もとより先に、顔の表情を見てしまふ。

「手の動きは、顔の表情より早い」という先生のご意見からおしはかると、顔を見て、それから、おもむろに手もとを見るのでは、手や指先の動きは、すでに第二段階に入っているわけである。

幼稚園児の場合、手の動きをほとんど

ど、読みとることができなかつたので、（私の子どもの場合、どうか）と考え、ある日、二人の姉妹の手もとをいっしょうけんめい見つけた。

おもしろいことに、自分の子どもの場合その手の表情をよみ取ることができ、テレビをみている子どもの指先だけ見ている、クライマックスがわかる。

おはじきをしている手も、使わない左手が、素直に、「できるかな」「お姉ちゃんに負けたくない」「今度こそがんばろう」など、固くなった指先で、さまざまなことを語っている。

子どもの手もとの動きを読みとるためには子どもの日頃の生活を知っていないければならぬのだろうか。それも、きわめて、しっかりと把握した上でないと読みとることができないとしたら、今のところこの方法で、子どもの心理状態を知ることのできるのには、ベテランの保育者か、母親だけだということになる。

教員養成を仕事にしている私としては、清水先生のご研究が、将来は、経験

の浅い保育者の、子ども理解のための一つの便利な方法として、一般化していくことができたらいとお考える。

「こんな子どもは、こんな時、こんな手の動きをする。それはこんな意味を持っている」手の動きは、同じ場面であっても、その子どもの年齢、性、性格によつて、それぞれが違った表現をするに違いない。外向的な子どもの動きには、どんな特徴があるだろうか、内向的な子どもの場合はどうだろうか。こう考えていくと、相当たくさんさんの事例を集める必要がある。

清水先生も、会の席上で、協力者を求めていらつしやう。

多くの資料を集めている間に、いくつかの傾向が浮かび上がり、系統化できるようになつたら、保育者も、母親も、子どもの動作や、顔の表情に合わせて、子どもの手もとの動きを観察して、的確にその心理状態をとらえ、適切な助言をしてやることができよう。

会の最後に「われわれはとかく仕事を

系統化しなくなるのだが、この研究は清水先生らしくてよいと思うので、あまりまとめることばかり考えず、いろいろな場面を集めるとよいだろう」と話し合つた。

なるほど、私たちは、清水先生に早くまとめて欲しいとねがい、先生も結論を急がれるとかえつて危険であり、その上、先生のお仕事特有の味を失うことになるかもしれない。清水先生の研究のすばらしさは、なんといっても、先生の子どもの心を理解していこうとするたゆまざる努力が「子どもたちの手もとの動きさえ見のがさなかつた」ということにある。先生の保育の緻密さが、とうとう子どもの手や指先の表情という細部の観察に及んだことに敬意を表したい。

会の中で、先生は、子どもの手・指先の動きのよみを言葉の不自由な子どもたちの保育に大いに役立てたいと話されていたが、これこそ、先生のご研究のもつとも生きるところと考え、今後のご活躍を期待する。